

福澤研寬七二夕一通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

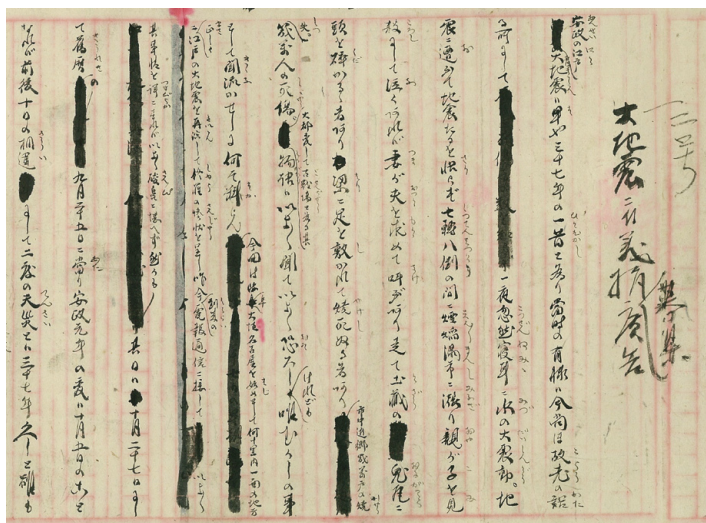
第14号 2011年3月31日 発行

目次

＊福沢研究センターセミナー……………	2	＊主な新収資料……………	6
＊『慶應義塾史事典』および『福澤論吉事典』の刊行 ……	3	＊センター諸記録（2010年10月～2011年3月）……………	7
＊福沢研究センターシンポジウム……………	4	＊スタッフ一覧……………	8
＊主な動き……………	5		



金一圓	芝區西三丁目十番地 中村貞大
金一圓	芝區區樂地一丁目十八番地 美濃部順二
金二圓	麴町區永田町二丁目二十九番地 岩本鐘之助
金二圓	靜岡縣伊豆天城山 兒玉淺次郎
金二圓	麻布區本村町百七十九番地 玉木誠二郎
金一圓	日本橋區北精町十一番地 前角茂十郎
金一圓	芝區明舟町十八番地 內山太一郎
金一圓	麻布區北新門前町十五番地 今西直太郎
金一圓	京橋區堀左衛門町四番地 大倉信太郎
金一圓	芝區愛宕下町三丁目二番地 所 濱五郎
金五十圓	芝三田二丁目二番地 禰澤 諭吉
金十圓	同所 同家 族
金二圓	橫濱市羽衣町一丁目三十二番地 松本治三郎
金二十圓	日本橋區兜町三番地 矢嶋 平造
金五圓	芝區三田小山町五番地 岡田治衛武
金五圓	日本橋通旅籠町十八番地 芳賀吉之助
金二十圓	深川區佐賀町一丁目四十六番地 増田 幸七



＊ 福沢諭吉と災害救援 ＊

福沢諭吉は、災害救援においてメディアが果たしうる役割に最初に着目した人の一人であった。自ら経営していた新聞『時事新報』において、たびたび義捐金募集を行い、大きな成果を収めた。そもそも紙上で義捐金活動を行った最初は明治18（1885）年のノルマントン号事件の時で、これは多少政治的な運動であったが、3年後に起こった磐梯山の大噴火にあたっては、『時事新報』がいち早く呼びかけて東京の15新聞社が連名で義捐金を募集し、『時事新報』が最大の応募額を集めた。さらに3年後の明治24年10月28日には、濃尾地震が起こった。『時事新報』は同月30日に早くも「大地震に付義捐金募集広告」を掲載して義捐金募集を開始、その広告は福沢自らが筆を執った原稿が残されている（写真右）。

福沢は災害救援とは日本人が「国民」であることを確認する機会ととらえた。義捐金は救援の実を挙げられるほどの額にはならないと見通しながら、その行為は被災民の情を慰め、不平等条約をかかえる日本人の「徳義心」を世界に示すとし、一方で復興の実には政府の果敢なる政策によるべきであると説いた。そして福沢は、連日義捐金応募者の姓名を、額で差をつけず到着順に全て紹介することに、紙幅を大きく割いた。写真左は明治29年6月15日に発生した三陸大津波に際しての義捐金応募者一覧に見える福沢の名である。福沢は50円の高額を寄付しながら1円の義捐者と同列に掲載されている。それぞれが応分の協力をする、いわば「社中」としての日本国を演出した福沢の工夫であった。(都倉)

「万国公法」受容と文明化構想

—西周と津田真道のオランダ留学を中心に—

明治大学政治経済学部准教授 おおくぼ たけ はる 大久保 健 晴



「開国」を契機に、条約交渉が政治的課題として浮上するとともに、西洋世界の法・道徳観念に対して規範的な問題意識が喚起され、この世界における「道理」が問い直された幕末・明治初期、新しい知識として高い関心を集めたのが、西洋諸国の外交・国際認識を支える国際法「万国公法」であった。

当時、日本に初めて体系的な国際法知識をもたらした書として知られるのが、H・ホイートンの *Elements of International Law* を在中国宣教師 W・マーティンが漢訳した、『万国公法』（1864年刊）である。この書では、自然法学説を巡って「性法・天理」などの漢訳語が多用されたことから、当時の日本では、万国公法が時に儒学の「道」の観念と重ねられ「天地の公道」として理解されたことが、先行研究で指摘されてきた。

しかし同時期、同じく万国公法の名を冠した書物がもう一冊、出版されている。ライデン大学教授 S・フィッセルリングが口述し、西周が訳述した『畢洒林氏万国公法』である。西周と津田真道は幕末期、文久2（1862）年より、徳川政権初の欧州留学生としてオランダに渡り、フィッセルリングから自然法、国際法、国法、経済学、統計学という五科講義を学んだ。その成果の一つが『畢洒林氏万国公法』（1868年刊）である。

この講義では、自然法は一つの法的源泉であるが、その関心は専ら、条約や慣習を通じて歴史的に形成された、文明の公法としての同時代ヨーロッパ国際法「泰西公法」に向けられる。フィッセルリングはそこで、着弾距離説や無差別戦争観を採り入れながら、主権国家間の法としての「泰西公法」の様態を描き出す。それはまた、勢力均衡を背景とした「信実」（goede trouw）というモラルのもと、自由貿易や立憲主義などの諸価値を共有するヨーロッパ近代のなかで形作られてきたものでもあった。

それ故に西と津田にとっては、この講義内容をヨーロッパの外部からいかに受け止めるかが重要な問題となる。講義では、国家の自主権や平等権は、泰西公法のもと主権国家として承認されて初めて効力を持つとされる。またヨーロッパ諸国民の保護を理由に、「泰西公法の同盟」ではない日本や中国に対する領事裁判権が規定される。さらに泰西公法では、条約締結は双方の対等な意思によると考えられるため、強国によって武力を背景に無理やり不平等な条約を結ばされた場合でも、一度締結した以上は簡単に破棄できない。それが泰西公法における「信実の道」である。

これは一見すると、西洋列強による文明という名の理

不尽な教えにも映る。しかしなお、そこには力の論理のみに還元されない要素が含まれており、問題は複雑である。第一にそれは、交際の意義を説き、残虐な戦争行為を禁止し、諸個人の権利に根ざした立憲思想を擁護する点で、法的・道徳的価値を有している。第二に、自由貿易論を経済学的真理として認めるのであれば、泰西公法を受け入れる以外に選択肢はない。ここに西と津田が直面した課題が立ち現れる。

帰国後の西と津田は『明六雑誌』で、保護税導入を批判し、立憲政体と自由交易の実現を唱え、内地旅行容認論を積極的に展開する。彼らはそのなかで、領事裁判権の撤廃と関税自主権の回復なしに内地旅行は実施できないと説く論者を斥ける。むしろ内地旅行によって外国交際が活性化し、一般人民の智識も開化する。その時初めて日本は「独立不羈の自主帝国」として条約改正を実現できる。このように、自由貿易と立憲思想のうちに文明的価値を見出し、外国交際の拡充を唱える津田と西の言説はまた、自国は未だ開化の途上にあるという認識を媒介に、不平等条約を巡る国際法上の課題を棚上げする態度と表裏の関係にあった。

それに対して根源的な批判を加えたのが福沢諭吉である。福沢によれば、西洋の「無形」の文明的元素の摂取は重要だが、貿易など「有形」の外国交際は日本に甚大な被害を与えている。さらに領事裁判制度により、無気無力の人民はさらに卑屈になっている。内地旅行は時期尚早であり、まずは「唯内を修めて、人民一般の気力を養う」必要がある。その上で西周に対し、現実の外国交際とは所詮「パワ、イス、ライト」ではないかと批判する。こうして福沢は、西と津田が展開する自由交易、万国公法、内地旅行論を、泰西の権力によって創出されたイデオロギー的言説に過ぎないと喝破し、外国交際と独立との鋭い緊張とディレンマを直視する。

とは言え、西と津田もまた、万国公法が「パワ、イス、ライト」の所産であることを深く認識していた。むしろ彼らはそれ故に、不平等条約を甘受しながらも、自由貿易と外国交際を通じて「独立不羈の自主帝国」を目指す以外、日本が生き残る道はないと考えた。

「国際法」をいかに捉え、泰西公法の周縁から、ヨーロッパが体現する文明的価値をどう判断するか。西・津田と福沢との間の論争は、その後の近代日本が抱え続ける深刻な政治思想的課題を先駆的に体現したものと言えるのではないのか。

（本稿は2011年3月2日に行われた福沢研究センターセミナーの概要である。）

『慶應義塾史事典』および『福沢諭吉事典』の刊行

慶應義塾常任理事 わた べ なお き
渡 部 直 樹



2008年11月に、慶應義塾創立150年の記念出版物として刊行した『慶應義塾史事典』に続き、昨年12月『福沢諭吉事典』が無事刊行の運びとなった。2010年は1835年生まれの福沢にとって、生誕後175年の記念すべき年であり、同年中に刊行することができたのは喜びである。

この2つの事典は、『慶應義塾150年史資料集』の別巻1別巻2として刊行された。刊行までの経緯は以下のようなものである。慶應義塾福沢研究センターにおいて、最初に創立150年に向け記念出版物の検討が始められたのは、1993年に遡る。その後1996年に、当時の松崎欣一福沢研究センター副所長を委員長に150年事業検討委員会が組織され、会議やセミナーを開きながら、海外も含めた他大学の事例などを参考に検討を重ねた。その結果、①創立100年以降に関する資料の収集や整理が不十分である、②組織が拡大し慶應義塾としてのまとまった歴史像を描きにくい、③記念出版として通史を出版することで、ある見方のみが正史、すなわち慶應義塾の正しい歴史となってしまうのではないかといった点が懸念され、記念出版物は『慶應義塾百年史』のような通史ではなく、別の形の出版物を企画することになった。

そして将来的に刊行物として通史を出すことになって、まず必要となるのは十分な資料であるということで意見が一致し、『慶應義塾創立150年史資料集』の企画検討を開始した。しかしながら、1997年になると福沢諭吉没後100年記念事業として『福沢諭吉書簡集』の編纂が慶應義塾理事会において決定し、福沢研究センターの常勤スタッフおよび150年事業検討委員会の主要メンバーは、以後『福沢諭吉書簡集』全9巻の編纂を優先することになった。また途中で没後100年記念の展覧会「世紀をつらぬく福沢諭吉展」の開催が決定し、その企画運営も加わり、結局『慶應義塾創立150年史資料集』について検討を再開したのは、書簡集刊行後の2003年であった。

再び150年事業検討委員会が開かれ、2004年2月には創立150年記念事業検討ワーキンググループも組織された。議論の結果、創立150年にあたる2008年には資料集の別巻として『慶應義塾史事典』を刊行することが計画された。その後、2004年末に小室正紀福沢研究センター所長（当時）を座長に慶應義塾創立150年史資料集編纂委員会が組織された。それに先立ち慶應義塾では、2004年7月に創立150年事業準備委員会、翌2005年7月に創立150年記念事業委員会、さらに翌年その部会として創立150年記念誌刊行委員会が発足し、第1回の委員会で

『慶應義塾150年史資料集』の刊行と、別巻として『慶應義塾史事典』および『福沢諭吉事典』の刊行が決定した。

『慶應義塾史事典』は、慶應義塾に所属する教職員11名が編集委員となり、2004年12月から2008年7月までに、31回の編集委員会および4回の合宿を行い、7章立て（Ⅰ慶應義塾の150年 Ⅱ大学・大学院・研究所 Ⅲ一貫教育校 Ⅳ教育・研究の支援 Ⅴ塾生と塾員の絆 Ⅵキャンパス Ⅶ社中の人びと）、付録、年表合わせて944頁で出来上がった。

また『福沢諭吉事典』は学外の研究機関に所属する者3名と慶應義塾に所属する教員7名が編集委員となり、2006年3月から33回の編集委員会および4回の合宿を行った。途中『慶應義塾史事典』の刊行が迫り、また創立150年記念展覧会「未来をひらく福沢諭吉展」（東京・福岡・大阪）「福沢諭吉と神奈川 すべては横浜にはじまる」展（横浜）のために、半年ほど編集作業を行うことができない時期もあったが、無事10章立て（Ⅰ生涯 Ⅱ人びと Ⅲ著作 Ⅳ漢詩 Ⅴことば Ⅵ表象 Ⅶ書簡宛名一覧 Ⅷ『時事新報』社説・漫言一覧 Ⅸ年譜 Ⅹ基本文献）1164頁で刊行の運びとなった。

『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』ともに大部なものとなったが、両事典とも、研究者のみならず一般的な読者、学生や場合によっては高校生までもを含め、慶應義塾史あるいは福沢諭吉に関心を抱く多くの方々に利用してもらえよう、編集作業を進めた。単に引いて調べるだけでなく、読むことができる事典を目指し基礎的な情報はもちろんのこと、資料として使用することができる各種データも付録として加えた。この2つの事典が、今後の慶應義塾史研究、福沢諭吉研究、ひいては近代日本研究に寄与することができれば幸いである。



P.4 シンポジウムのパネリストと司会（2011年3月10日）

『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』完成記念

福沢研究センターシンポジウムの開催

3月10日（木）午後3時から、東館4階セミナー室において、『慶應義塾150年史資料集』別巻『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』の完成を記念し、2つの事典をめぐりシンポジウムを開催した。

パネリストには、『慶應義塾史事典』より先に学院・学園に関する事典として、それぞれ『関西学院事典』（2001年）『日本女子大学学園事典』（2001年）を出版された関西学院大学と日本女子大学から編集に携わられた井上琢智氏（経済学部）と秋山俱子氏（元成瀬記念館）を、また150年史の編纂を決定された早稲田大学から大学史資料センター所長大日方純夫氏（文学学術院）をお招きした。本塾からは福沢研究センター所員宮内環（経済学部）が参加し、2つの事典を題材に、その意義や問題点、活用法などについて議論した。

創立150年事業担当渡部直樹常任理事による開会挨拶のあと、まず井上氏から『『慶應義塾史事典』－「調べる」と「読む」の両立』の題で、以下のような報告があった。『関西学院事典』は創立記念事業であったが、その後導入された自己点検・評価システムや自校史教育において、大いに役立っている。『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』は、調べることと読むことの両立に苦心している様子がわかる。2つの事典を比べた場合、たとえば双方に掲載されている人物の記述の不統一などが気になった。筆者が違えば、当然評価視点も異なるのであろうが、たとえば複数の名前をもつ人物については、列記されている名前は同じ方がいいのではないか、読者のことを考えればそのような統一は必要と思われた。また人物の選定基準も気になるところである。項目選定でいえば、慶應義塾大学の表記はなぜ Keio University なのかかわかる項目がなく、また「理事会」という項目もない、ペンマークに関する VI ガイドラインが明示されていない、セメスター制の導入などはどのように調べればよいのかといった点も気になった。今後は大部な事典なので、ハンディにする工夫としてデジタル化も考えられ、そうすれば2つの事典の相互検索システムの構築も可能であろう。また通史は正史を作り出してしまうというが、正史があってこそ「多事争論」を引き起こすことができるのではないであろうかというご意見であった。

続いて秋山氏からは『『日本女子大学学園事典－創立100年の軌跡』の紹介及び『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』の感想』と題する報告を伺った。日本女子大学で学園事典が計画されたのは、学園の歴史の中に事典を編集するに足りうる材料があり、また多くの執筆者を確保することが可能であり（執筆者は276名）、成瀬記念館の研究蓄積もあったことによる。また事典が完成すれ

ば、日々寄せられる問い合わせへの返答に非常に便利であると考えられた。それまで第1回の卒業生の人数が資料によって異なるといった不便もあったので、付表も作成した。項目の選定には苦心し、特に人物では詳しい経歴がわからないために掲載できなかった人物もあった。現在事典はHPで見ることができ、生涯教育などにも利用されている。『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』は2つの事典がセットになって福沢諭吉と慶應義塾がわかる。ただ女子学生に関する記述が少ないと感じた。戦後女子大学は大学院が作れなかったので、慶應義塾にも進学しているはずである。また学部学科の変遷が一覧で見られるとわかりやすかったと思う。

3番目の報告は宮内からで、『『万国政表』後の日本における統計学の展開』と題し、他の報告とは少し異なり、2つの事典が統計学の研究上どのように活用できるかというテーマであった。『万国政表』の出版とその後について、緒方洪庵、杉亨二、岡本節蔵、高木兼寛、北里柴三郎、森鷗外など事典から詳しくわかることと、「製表社」や「駿河国人別帳」、統計学という訳語についてなど事典に記述が見当たらないものがあり、また森林太郎とスタチスチック社今井武夫の、スタチスチックに「統計学」の訳語を与えるべきか、統計学は因果を明らかにする科学か相関を示す理法かといった論争についての言及はなされていないことが指摘された。

最後に大日方純夫氏からは、『福沢諭吉事典』は重層的で複合的であり、読む、引く、調べる、それぞれの使い方が意識されている。項目ごとで完結しながら流れを留めず、福沢という万華鏡を通して、幕末・維新から自由民権、日清戦争までの近代日本をみることができる。しかし項目の完結性と連続性の両立はむずかしく、人物項目で各人物については情報を得られても、人脈のネットワークは見えにくくなっている。『福沢諭吉事典』に比較して大隈重信事典を想像してみると、時代的にはほ



シンポジウムの会場風景

ほ同じであるが、思想家・教育者としての福沢と政治家としての大隈という基本的な性格、学校や政治との距離のおき方、書き残した文献の有無、伝記や研究の多少からくる相違が考えられる。辛口の評をという注文に応えれば、大隈重信との関係に言及される項目はいろいろあるが、立憲改進黨人脈（三田派）に関する解説がなく、同人脈と福沢の関係がこの事典からはみえてこない。また福沢が考える文明をどう問うかという問題は、同時に未開や野蛮をどう考えるかという問題であり、その視点が重要であろう。アジアに対しても、朝鮮との関係に言及する項目はあるが、清との関係をどう捉えていたのか、朝鮮に対しても中国に対しても援助する立場をとるということは、対等とは考えていないということになる。こうした点に踏み込んだ記述も必要ではないかと思う。

ひとり約20分ずつのご報告のあと、各パネリストからの質問に編集委員が答えた。両事典とも編集委員長は置かなかったが、委員会の座長を『慶應義塾史事典』は小室正紀、『福沢諭吉事典』は松崎欣一が務めたので、両氏より返答があった。まず小室は、2つの事典の性格の違いから執筆者も異なり、ゆえに人物評価に相違も生じるし、むしろそれを活かす方向で考えた、しかし細かい点の統一には、もう少し時間が掛けられるとよかったと思う。またある部分は各部局や学部任せざるをえなかったもので、人選などで非常に苦労をした。多事争論は重要であり、正史は書かないというわけではなく、先立

つ作業として十分な資料の収集と整理が必要であろうと考えた結果であると説明があった。また松崎からは、さまざまな要求に応えたいと思いながら編集をした結果、非常に分量が増え、多く断念をして、それでも1164頁という分量になっている。また人物選定は、福沢は多くの書簡が残っているので、そこに表れる人間関係をひとつの基準としたが、書簡の残存には親密さとは別の要因も多く、むずかしい判断であった。人脈がわかるように群像で執筆する試みも行ったが、資料が足りなくて書ききれなかった部分と、時間が足りなかった部分がある、といった説明があった。司会の西沢からは、男女の選択の基準を同じにすることが平等なのか女性であることを加味することが平等なのかむずかしかった。『慶應義塾史事典』の付録ではこれまであやふやだった様々な数値に正確を期し、男女共同参画の実態がわかるようなデータも入れたことを伝えた。

会場からは、慶應義塾で行われてきた研究の動向について『慶應義塾史事典』にどの程度掲載されているかに関する質問もあった。司会から、自分たちの業績の自画自賛にならないよう編集したが、結果として逆に研究動向の記載は少なくなってしまうかもしれないと補足した。最後に、米山光儀福沢研究センター所長より挨拶をし、予定より少し遅れて午後5時45分ごろの散会となった。来場者は54名の盛会であった。

(文責 西沢直子)

■『福沢諭吉事典』の刊行

福澤諭吉生誕175年であった2010年の12月25日、『福澤諭吉事典』が刊行された。編集委員会は2006年3月に発足し、一時期の中断はあったが、完成までに4回の合宿を含め37回の編集委員会を開催し、5年近くの時間を費やしての完成となった。当初の予定を100ページほど越え、A5版、1164ページ。事典は、「Ⅰ生涯」、「Ⅱ人びと」、「Ⅲ著作」、「Ⅳ漢詩」、「Ⅴことば」、「Ⅵ表象」、「Ⅶ書簡宛名一覧」、「Ⅷ『時事新報』社説・漫言一覧」、「Ⅸ年譜」、「Ⅹ基本文献」からなり、巻末には索引がついている。「調べる」だけでなく、「読む」そして「見る」事典として編集がされている。

なお、細心の注意を払って編集が行われたが、いくつかの誤りが見つかっているため、3月9日に福澤研究センターのホームページに「正誤表」を掲載した。

■『近代日本研究』第27巻の発行

2月28日に定期刊行物である『近代日本研究』第27巻を発行した。2010年が福澤諭吉生誕175年にあたることから、「福澤諭吉生誕175年 福澤と大阪」を小特集とし、論説2本と講演録を掲載している。また、2010年1月に福澤研究センター顧問の西川俊作元所長が急逝されたことを受け、1996年に慶應義塾大学の新入生を対象に行われた西川氏の講演を収録した。

■セミナーの開催

3月2日15時30分より17時30分まで、三田キャンパス東館4階セミナー室で福沢研究センターセミナーを開催した。詳細はP.2を参照されたい。

■『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』完成記念シンポジウムの開催

『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』の完成を記念して、シンポジウム「福澤諭吉と慶應義塾 ―2つの事典からの展望」が3月10日15時より17時30分まで三田キャンパス東館4階セミナー室で開催された。

150年事業担当の渡部直樹常任理事からの挨拶に続き、司会の西沢直子福沢研究センター教授より『慶應義塾史事典』『福澤諭吉事典』の紹介があり、その後、井上琢智氏（関西学院大学経済学部教授）、秋山俱子氏（元日本女子大学成瀬記念館）、宮内環（慶應義塾大学経済学部准教授・福沢研究センター所員）、大日方純夫氏（早稲田大学文学学術院教授・大学史資料センター所長）の4氏から提案を受け、活発な議論が行われた。

■『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』出版記念会の開催

3月10日18時より三田キャンパス内のファカルティークラブで、関係者を招いて、『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』の出版記念会が開催された。

❖ 主な新収資料

平成22年9月から平成23年2月までの間に福沢研究センターに収蔵された資料の主なもの、および平成21・22年度に新たに収蔵された福沢諭吉書簡のうち前号までに掲載しなかったものを紹介します。多くの方々から資料をいただきましたが、すべての資料をご紹介することができず、申し訳ありません。
(物故者敬称略)

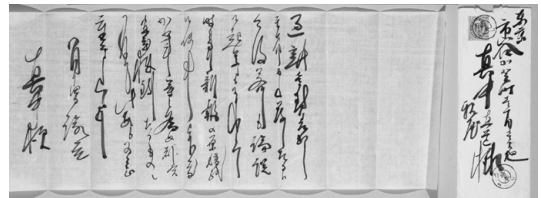
福沢諭吉関係資料

■ 遺墨 五言絶句漢詩 「黒雲吐明月 霖雨報晴天 天変与人事 由来不偶然」 【前田壽一氏寄贈】
こくうんめいげつ は りんあめせいてん ほう てんべん じん じ ゆらいぐうぜん
「黒雲明月を吐き 霖雨晴天を報ず 天変と人事と 由来偶然ならず」

絹本。書き始めに捺される関防印は「自由自在不自由之中」、書き終えた位置に捺される落款は、「福沢諭吉」の陽刻と「三十一谷人」の陰刻。同一の詩が明治12(1879)年には別人に贈られているので、作詞がそれ以前であることは確かである。久原房之助旧蔵品。久原は明治2年山口県阿武郡萩町生まれ。22年に慶應義塾卒業後、森村組、藤田組を経て、38年日立鉱業会社設立、大正元(1912)年に久原鉱業と改称。昭和3(1928)年衆議院議員に当選、田中義一内閣では通信大臣を務める。政友会幹事長、同総裁。長く慶應義塾評議員も務めた。昭和40年歿。

■ 山東直砥宛書簡 明治13(1880)年カ8月21日付 【購入】

「過日御話之一条」が簡単には進まないことを述べたもの。「過日御話之一条」とは、三菱による高島炭鉱買収の一件と思われる。山東は和歌山出身で、箱館府権府判事を務めた後、神奈川県参事を務めた時期もあり、早稲田の北門社新塾や和歌山の猛山学校で教育に携わり、出版業にも従事。福沢との接点は、慶應義塾内の和歌山人脈か。



■ 真中直道宛書簡 明治20(1887)年8月14日付 【購入】

今後の論説の執筆には、時事新報社の原稿用紙を使用するように伝えるもの(写真上)。真中は明治11年慶應義塾卒業、駅通局や在英日本公使館に勤務し、のち法制局参事官、農商務書記官などを務める。野紙で特許を得、特許野紙商会設立。



■ 高木喜一郎宛書簡 明治22(1889)年1月26日付 【購入】

時事新報出張所の会計についての詳細な報告を謝し、相談のうえ返答すると伝える。高木は中津藩士の子に生まれ、明治2年慶應義塾入塾、卒業後慶應義塾出版局に勤め、のち時事新報社を経て、大阪毎日新聞社営業主任、同社社長。

■ 福沢諭吉訪欧当時銅版画 【宮永孝氏寄贈】

イギリスのドーバー、ロンドン・ドックスとテムズ・トンネル、オランダのロッテルダム、ユトレヒト(写真下)ほか

慶應義塾関係資料

■ ワグネルソサィエティー関係資料

【西川杏太郎氏寄贈】

西川氏は昭和25(1950)年文学部卒。現在神奈川県立歴史博物館館長。在学中はオーケストラや合唱団が属する慶應義塾ワグネルソサィエティーに所属し活躍した。この度、第2回卒業生送別演奏会(於日本橋三越ホール、昭和14年1月29日)チラシ、昭和18年度卒業生送別演奏会プログラム(於慶應義塾大講堂、7月11日)、塾生出陣壮行大音楽会プログラム(於三田慶應義塾大講堂、昭和18年11月17日)、に始まり、昭和29年3、4月ごろまでの演奏会のポスターやチラシ、プログラム、写真などを中心に89点をご寄贈いただいた。

■ 小泉信三手沢本『ジョージ五世伝』

【井ヶ田文一氏寄贈】

小泉が東宮の教育掛を務めていたときに、テキストとして使用したもの。ジョージ五世は英国王で在位は1910～36年、第1次大戦中と戦後の困難な時代に、重厚かつ公明正大な態度で立憲君主として国民から敬われた。

■ 諸会議

- *平成22年度第2回運営委員会(11月16日)
- *美術品管理運用委員会(12月10日)
- *平成22年度第2回センター会議(12月15日)
- *日吉寄宿舎改修計画に関する諮問委員会(12月27日、1月28日)
- *管理職全体会議(1月12日)
- *小泉基金運営委員会(1月21日)
- *『近代日本研究』第28巻第1回編集委員会(1月31日)
- *ワークショップ〈近世近代研究交流会と合同開催〉
「幕末維新期にみる地域教育体制の展開」報告者：工藤航平氏(国文学研究資料館)／「アジア太平洋戦争期における地域と学校—学童集団疎開を視点として」報告者：柄越祥子(慶應義塾大学福沢研究センター)(2月26日)
- *第15回調査員ミーティング(3月2日)
- *平成22年度第3回運営委員会(3月9日)

■ 人事

〈事務局異動〉11月1日付

赤堀美和子君 湘南藤沢メディアセンター係主任(看護医療学部)
清野早苗君 福沢研究センター係主任

■ 展示協力・見学受入

- *長崎歴史文化博物館岡本健一郎氏、資料借用(11月10日)および返却(1月18日)

■ 主な来往

- *愛知大学から佐藤学長来訪(1月26日)
- *韓国全南大学から2名来訪(2月28日)

■ 出張・見学

- *赤堀係主任、全国大学史資料協議会2010年度総会・全国研究会に参加のため熊本大学(10月6日～8日)
 - *都倉専任講師、吉岡調査員、徳永調査員、資料の事前調査のため長野県安曇野市(11月24日～25日)
 - *西沢教授、石井研究嘱託、長谷川調査員、資料撮影のため群馬県伊勢崎市(11月25日)
 - *西沢教授、大庭調査員、福沢記念館貸出し書幅の受取りのため福岡(12月1日)
 - *米山所長、井上円了運営委員会出席のため東洋大学(12月2日)
 - *西沢教授、シンポジウム打合せのため韓国ソウル(12月2日～4日)
 - *米山所長、西沢教授、都倉専任講師、2009年開催展覧会の協力御礼のため神奈川県立歴史博物館(12月9日)
 - *西沢教授、韓国三田会・ソウル三田会出席(1月13日)、韓国女性史学会ワークショップ参加(1月14～15日)のためソウル
 - *西沢教授、都倉講師、展示替えのため中津市福沢記念館(2月1日～3日、3月25日～31日)
 - *米山所長、所蔵資料調査のため岡山興譲館高校(2月7日)
 - *都倉講師、資料調査のため大阪国民会館(2月22日)
- ## ■ 講師派遣
- *所員有末教授、KORCセンター講座において「戦後社会科学における福沢諭吉思想の受容と変貌」と題して講義(10月2日)
 - *西沢教授、ロータリークラブ関西合同集会にて「福沢諭吉の家族論」と題して講演(10月3日)

- *西沢教授、杉並三田会史跡見学会の案内および「21世紀における『学問のすすめ』」と題して講演(10月8日)
 - *米山所長、福沢文明塾で「修身要領」について講義(10月21日)
 - *米山所長、北九州三田会総会で「福沢生誕175年」と題して講演(10月22日)
 - *所員池田教授、KORCセンター講座において「西欧経済思想と福沢諭吉の周辺」と題して講義(10月23日)
 - *都倉専任講師、全国通信三田会秋季幹事会講演会で「福沢諭吉の文明論～特に地方への眼差し」と題して講演(10月23日)
 - *西沢教授、中津市「第48回福沢諭吉記念祭全国高等学校弁論大会」で審査員(11月18日)
 - *米山所長、SFC 中高の5年生総合授業で「福沢生誕175年」と題して講演(11月25日)
 - *所員井奥教授、KORCセンター講座で「福沢諭吉の在来産業観」と題して講義(11月27日)
 - *坂井顧問、第10回全国地方教育史学会公開研究会において「明治前・中期における慶應義塾と地方教育」と題して講演(11月27日)
 - *西沢教授、福沢諭吉文明塾で「社中とは何か 慶應コミュニティの誕生」と題して講義(11月27日)
 - *都倉専任講師、日吉台地下壕保存の会講演会にて「慶應義塾と戦争」と題して講演(12月18日)
 - *都倉専任講師、大阪慶應倶楽部で発見された元石川塾長の記念碑原稿について大阪の福沢先生誕生記念祝賀会にて報告(1月10日)
 - *西沢教授、東京慶應倶楽部で「福沢諭吉の女性論—『福沢諭吉事典』を通して再考したこと—」と題して講演(1月25日)
 - *西沢教授、KORCセンター講座において「『福沢諭吉事典』を読む」と題して講義(1月29日)
 - *西沢教授、洋学史研究会で「文久遣欧使節随行体験と福沢諭吉の近代化構想」と題して報告(1月30日)
 - *都倉専任講師、中津市の福沢諭吉先生111回忌法要記念講演会にて「「俗」というキーワードから見た福沢諭吉」と題して講演(2月3日)
 - *西沢教授、交詢社午餐会で「福沢諭吉の女性論・家族論とその現代的意義」と題して講演(2月4日)
 - *西沢教授、BDKE勉強会で「福沢諭吉の女性論—『福沢諭吉事典』から再考する—」と題して報告(2月5日)
 - *西沢教授、福沢諭吉協会土曜セミナーで「福沢諭吉の女性論と福沢家の女性たち」と題して講演(3月26日)
- ## ■ 訃報
- *元福沢研究センター事務長福田欣治君逝去(10月9日)
- ## ■ その他
- *米山所長、西沢教授、『三田評論』2010年12月号座談会(10月28日)
 - *米山所長、酒井事務長、造幣局から慶應義塾への福沢記念メダル贈呈式に出席(12月6日)
 - *『福沢諭吉事典』が慶應義塾大学出版会から刊行(12月25日)
 - *故鷲塚泰光氏ご遺族より寄付金(1月5日)
 - *第176回福沢先生誕生記念会に伴う資料展示(1月10日)

スタッフ一覧

所 長	米山 光儀	教職課程センター教授	掛川トミ子	関西大学名誉教授
副 所 長	岩谷 十郎	法学部教授	片岡 豊	白鷗大学教授
	平野 隆	商学部教授	我部 政男	山梨学院大学教授
専任所員	西沢 直子	福沢研究センター教授	川崎 勝	南山大学教授
	都倉 武之	福沢研究センター専任講師	佐藤 正幸	山梨大学教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
(兼運営委員)	梅垣 理郎	総合政策学部教授	進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
	小野 修三	商学部教授	曾野 洋	四天王寺大学教授
	小室 正紀	経済学部教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
	沢田 達男	理工学部教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
	竹内 勤	医学部教授	浜野 潔	関西大学教授
	樽井 正義	文学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
	林 温	同	平山 洋	静岡県立大学助教
所 員	山内 慶太	看護医療学部教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
	有末 賢	法学部教授	前坊 洋	
	井奥 成彦	文学部教授	松沢 弘陽	
	牛島 利明	商学部教授	松田宏一郎	立教大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	宮村 治雄	成蹊大学教授
	太田 昭子	法学部教授	森川 英正	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	山田 央子	青山学院大学教授
	小川原正道	法学部准教授	林 宗元	韓国関東大学校教授
	加藤 三明	幼稚舎長	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	斎藤 暁子	女子高等学校教諭	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	末木 孝典	高等学校教諭	Nguyen thi Hanh Thuc	ホーチミン市外国語情報科学大学講師
	Ballhachett, Hellen	経済学部教授		
	宮内 環	経済学部准教授	研究嘱託	田中 康雄
顧 問	飯田 鼎	名誉教授	金 眞瑛	
	岩崎 弘	元幼稚舎教諭	巫 碧秀	
	河北 展生	名誉教授	三島 憲之	
	小泉 仰	同	石井寿美世	
	坂井 達朗	同	事務局	酒井 明夫 事務長
	佐志 傳	元高等学校教諭	清野 早苗	係主任
	寺崎 修	名誉教授	望月麻実子	嘱 託
	中村 勝己	同	松崎 佳美	同
	松崎 欣一	名誉教諭	印東 史子	派遣職員
客員所員	安西 敏三	甲南大学教授	山根 秋乃	非常勤嘱託
	飯田 泰三	島根県立大学教授	坂井 博美	同
	井田 進也	大妻女子大学教授		
	區 建英	新潟国際情報大学教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、13名
(3月31日現在)

この度の東日本大震災により被災されました方々に、心よりお見舞い申し上げます。
被災地の一日も早い復興を、スタッフ一同心より祈念いたします。
福沢研究センターは、事務室内のファイルが数十冊落下したものの、収蔵庫および
資料等には被害は見つかっておりません。今後とも注意深く点検を続けたいと思います。

慶應義塾福沢研究センター通信 第14号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2011年3月31日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印 刷 (有) 梅沢印刷所